カワサキの一一〇〇

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カワサキの1100

【Nコード】

N0490BA

【作者名】

景雪

【あらすじ】

美佳は就職活動中の大学生。ある企業の面接を終えて通りに出たところで、聞き覚えのある排気音を聞く。それは、川崎重工製の大型オートバイの排気音で、美佳は過去の記憶を呼び覚ます……

追憶

「福田さんのような綺麗な女性がいると、職場が華やかになりますね」

今の時代、それはほとんどセクハラと言っているいい台詞ではないだろうか。私は面接を担当する三人の真ん中に座っている、おそらく人事課長あたりの役職に就いているであろう良く肥えた中年男の、口元に醜く照かるできものを一瞥した。

「まさに才色兼備と言うのでしょうか。福田さんは」

小さく「いえ……」とだけ返事をした。それが私の出来得る全てだった。もつと言葉を続けると、就職試験で決して言ってはいけないような言葉を吐いてしまいそうだった。それに、人事課長と思われる目の前の人物を、睨んでしまいそうだった。だから私は視線を彼から外して、面接室の床に敷かれた灰色のフロアマットが、正方形に形作る色違いの濃淡を見た。大体は黒色が強いんだけど、たまに何故だか薄い色のグレーもあって、私は当惑した。何で一枚一枚が違う色なのか。大量生産している物ではないのだろうか。取っつけたように目立つ正方形の薄い色が、私の思慮、動作をつかさどっている部門に正常な働きをさせるのを、意地悪く妨害した。

「結果は、おって通知させていただきます。本日はお疲れ様でした」

一番右に座っている若い女性担当者が、最後だけ口を開いた。私はパイプ椅子から立ち上がって背骨に力を入れるように伸ばし、ほとんど直角に折れ曲がるくらい頭を下げた。視界にはちょうどフロアマットの薄い灰色が飛び込んできて、私は黒目の行く先を右に左に慌てて動かした。下げていた顔を上げると、耳にかけていた前髪が乱れて顔にかかり、ピンで留めるのを忘れたことに気付いた。私は右手の指の先で前髪をはじき、もう一度お辞儀をして面接室を後にした。首の後ろと背中に沿った部分に妙な違和感を覚えて、それ

が一年に数回しかかかない汗だと分かり、汗がにじんでいる身体のパーツを今すぐ新品に交換したい衝動に駆られた。

企業の外に出る時、受付の女性社員、私よりも五歳くらい歳上の目がやたらと大きい中肉中背の彼女が、私に向けて温度を一定に保ったまま微笑みを運んできた。「岸田」と書かれたネームプレートを付けた彼女が、三重に刻まれた深い縁取りの瞳を柔らかく放り投げてきても、私は瞬きをする程度の力で会釈を返すことしかできなかった。

徒歩三分ほどの地下鉄の駅に向かう。毎朝新聞で確認するのが日課となった降水確率は五十パーセントだったけど、荷物が多くなるのは嫌だったから折り畳み傘だけ持ってきた。見上げると雲が明るい部分と暗い部分を何層にも重ねて、真ん中にお日さまが控えているのが分かる明るさを、うつすらと隠していた。私は就職活動用に買った地味過ぎる鞆に入れて、今自分が最終面接を終えた企業の、ホームページの一部を白黒で印刷した紙を引つ張り出した。東京証券取引所二部上場、資本金十億某、社員の平均年齢四十二、三歳という情報は、それが一体何の意味を持っているのか、私には少しも実感としてわかかなかった。紙をまた鞆に入れようとすると、中に入っている筆箱や化粧品ポーチや色々な物につかかってしわくちゃになったけど、構わずに押し込んだ。すれ違った三十歳前後のスーツの男性が、それで気付かれないようにしているつもりなのか何度も視線を送ってきて、私は思いつきり音を出して紙を鞆の底にまで到達させることで、その視線を強制的に振り払った。

国道十五号線は平日夕方の込み合う時間帯前で、車の流れは速い。歩道の左側を歩いている私のすぐ横を、車は結構な速度で追い越していく。強引に車線変更したタクシーに警笛を鳴らす乗用車の、運転手の苛ついて顔が見えてしまわないように、視線を足元に落とした。地面には火がまだくすぶっている煙草の吸殻が捨てられていて、仕方なく視線を上げてもうすぐ青になる歩行者用信号の赤色を眺める。

その時、遠く背中に向こう側に、聞いたことのある音が響いた。

乗り物には詳しくないし興味もない、それについては女の子の標準を脱することのない私が、唯一聞き分けられる排気音。私は地面の底を削りながら鳴るその音が何の物であるか確信して、振り返った。

川崎重工業製空冷一〇六二CCのエンジンを積んだ、ZEPHYR一〇〇、ゼファアイルブンがちょうど私の視線の先に飛び込んできた。火の玉カラーの朱色と、真っ赤なショウエイのフルフェイスヘルメットが、私の黒目と白目の表面全部を夕焼けに近い色に染めた。ゼファアイルブンは私が見ていることなど関係がないのだから、太い排気音を片側三車線の国道に染みわたるように残して、車の流れの中に入り見えなくなってしまった。

四月にしては暑い日だった。青に変わった横断歩道を渡りながら、鞆からハンドタオルを取り出して額の汗を拭った。でも汗が次から次に出てきてしまうのは二十度を大きく超す気温のせいではなくて、さっき私の目の前を一瞬で走り去って行ったオートバイのせいだと分かっていた。ゼファアイルブンが吸いこまれていった方向を何度も目で追ったけど、私がどんな気持ちを目でぶつけても勿論ウターンして戻ってくるようなことはなかった。痛くなるくらい激しく打つてしまう鼓動を上着ごと押さえつけながら、鼓膜に引つかかかって微かに残っている直列四気筒の咆哮を、横断歩道を渡り終わる短い時間に無言で聞いていた。だけどそれは聞いていたつもりになっていただけで、その音は既に、私の身体のどこにも残っていないのではないか、そんなほとんど諦観としか思えない感情がこみ上げてきた。

あとは家に帰るだけだったけど、私は地下鉄の降り口に入る前にコーヒーショップに寄った。ゆっくり気持ちを鎮めたかったから。ブレンドをブラックで飲むと苦さがちょうど良かった。小さめのソファアームにもたれかかろうとしたら、背中にうつすらとじんんでいる汗を感じてしまい、背もたれと背中との間を少し開けた。

鞆から携帯電話を取り出す。私は滅多に写真を撮らないから、保

存されている画像はほとんどない。だけど一枚だけ、二年間消さないで取っておいた画像がある。パスワードで保護されたフォルダを開き、写真を画面に表示した。

火の玉カラーのゼファアイルレブんと、またがっているライダーがフルフェイスヘルメットを脇に抱えて、顔を崩して笑っている。じつと見ていると電力の消費を抑えようと画面がすぐに暗くなる。その度に操作ボタンの真ん中、「決定」ボタンを押してまたバックライトを明るくする。それはまるで、暗闇からゼファアイルレブんとライダーがぼおっと浮かび上がってくるように見えた。

大学生活の、はじまり

大学生生活は夢にも希望にも満たされていなかった。

栃木県で学力トップの県立女子高を卒業し、私は都内でも有名な私立大学に進んだ。裕福な家庭の子女が多く、アナウンサーなどの著名人を何人も輩出している大学だったから、正直に言うと、私だつて色々と期待していた。おしゃれでかっこいい大人の男の人と出会つたり、銀座や横浜なんかで素敵なデートをしたり。そういうことを経験できなかったという訳じゃない。私の大学生活が夢にも希望にも満たされていなかったのは、十八歳の少女が抱いていた想いが、幻想に過ぎなかったと知らされてしまったということだ。

私は背が高い方で、生まれつき太らない体質だったので努力しなくともすらりとしていた。両親に似て目も大きな二重で、顔の大きさ、手足の長さもおそらくバランスが良いのだろう、いわゆる「美人」の部類だつた。けどどしゃべるのが苦手で、友人が中々できず、同級生たちも容姿が良いくせに無口な私を敬遠していたのだろう、声をかけてくれる人もあまりいなかった。

着飾つた父と母、三つ下の弟を連れて臨んだ四月三日の入学式、渋谷から東急東横線に乗つて地下の駅を降り、地上に出ると目の前に大学へと続く銀杏並木が見えた。私たちと同じように両親や兄弟に囲まれた着なれないスーツ姿の新生が、改札口の付近に大勢塊を作つていた。中学を卒業したばかりの弟は人間の多さに辟易して、僕は東京の大学には行きたくないと言つた。ここは神奈川だと教えてあげると、神奈川でも東京でも一緒だよと彼はまだ子供っぽい頬を膨らませて、その顔が何故だかすごく可愛らしかつた。

銀杏並木の道を、入学式が行われる講堂までまっすぐ進んでいると、サークルを紹介する様々な色のちらしが、あらゆる方向から新入生を勧誘し、手を伸ばしてくる。私は入学祝で母に買ってもらったコーチのバッグ一杯にちらしを詰め込んで、それら一枚一枚が全

て「夢」と「希望」であると信じて疑わなかった。

入学式が終わり、駅を挟んで大学がある方とは逆の商店街でお昼を食べたけど、私は「夢」と「希望」が余りにも巨大過ぎて味も何も分からなかった。父は、「お父さんが大学生の頃に一度来たことがあるけど、あの頃は駅前にも何もなかったぞ」と当惑していた。三十年前の話なんて何の役にも立たないよと私は笑い、普段は余り笑うことのない私の笑顔が嬉しいのか、父も母も私の顔をじっと見ていた。弟もちらちらと、盗み見るように私のことを何度も見ていたようだ。

食事の後、下宿先のアパートに四人で向かった。一週間前に両親に手伝ってもらって引越は済んでいたから、私はその日からすぐに一人暮らしを始められる。東横線に乗って一駅、綱島駅で降り、五分ほど歩いた場所にアパートがある。父と母が前を歩き、並んで歩く私と弟との距離が少し開くと、弟は小声で話しかけてきた。

「お姉ちゃん、悪い男には引つかかるなよ」

「何、生意気言ってるのよ。あんたと違って私はしっかりしてるから大丈夫よ」

軽口を返してくるかと思ったら、弟はそれきり黙って下を向いてしまった。弟は小柄な母に似て背があまり高くない。でもヒールを脱げば、一六四センチの私と同じくらいにはなったのかな、少し低い位置の彼の目元を見つめた。

「啓太も、東京か神奈川の大学に入りなよ。お姉ちゃんに悪い虫が寄ってきたら追い払ってよ」

「いやだ。俺はあんな人ゴミ耐えられない」
何をむきになっていいのか、弟は坊主頭をかきむしって、街路樹の方向に意味もなく視線を移したようだった。高校では野球部に入らないと言っていた彼だけど、散髪は母のバリカンに任せっきりだ。

家族が宇都宮に帰ってから、私は一人暮らしで最初の夜を迎えた。毎週欠かさず観ているお笑い番組が、少しも面白く思えなかった。

部屋の隅に置いた十四インチの小さなテレビが、余計に小さく思えた。九時にはベッドに入って、新品なお日さまの匂いのする布団に包まれた。実家の周辺で買ってこちらに送ってくる前に、母が一度天日干ししてくれたのだと分かった。

人の声を聞いた気がして、私は浅い眠りから目を覚ました。枕元の目覚まし時計を暗闇に見ると、十時半頃だった。声は隣の部屋から聞こえてくるようだ。先週の引っ越しの際、タオルを持って挨拶に行ったら、隣の部屋には私より少し年上の女性が住んでいることを知った。同じ女性の一人暮らしで安心したのを覚えている。何かあったらいつでも言ってくださいと優しい言葉もかけてもらった。ただ隣の部屋から聞こえてくる女の声には、優しさのかけらさえ含まれていなかった。苦しむような、我慢するような、とても平常時に出す声とは思えなかった。女の声は高く、大きくなってくる。たまに短く、男のうめく声が混じり、ベッドがきしむ鈍く規則的な音が、二人の声に重なる。

私は両手の人差し指で耳を塞ぎ、隣からの声と音を聞こえないようにした。すぐに眠ってしまえばどんなに楽かと思っただけ、思えば思うほど目が冴えてくる気持ち悪さに支配された。指で強く塞いで血液の流れる音だけになった耳の奥に、私は母の声を聞いた。

大学合格が決まった次の日、専業主婦の母と二人で平日のランチに行くことになった。母が運転するコンパクトカーの助手席に乗って、国道四号線を北上した。車が信号で停まる度に私は沿道の桜の木を見た。枝の先の蕾はまだ小さくて、あと数週間すれば満開の花を咲かせるとは想像できない、まだ冬が多く残る日だった。

「美佳、まだ経験、ないわよね？」

「え……」

母の唐突過ぎる問いかけに、私はまともな答えられなかった。女子高だったし、友人も多くなかったから異性と交際した経験もなく、勿論セックスもまだ知らなかった。

「東京では、自分一人しかいないんだから、自分の身体は自分で守りなさい」

母の声を聞きながら、少しだけうなずいたつもりだったけど、母には私が頭を縦に振ったのが分からなかったかもしれない。本や漫画で読んだことがある、男と女が人に隠れてこそこそ行つその行為は、私にとって知らない世界の出来事、他人事にしか思えなかった。

だからこそ隣の部屋から聞こえてくる、気が違ったような女の鳴き声は、まだ男の人の手を握ったこともない私の心臓を、無茶苦茶に驚づかんだ。お母さん……。私は布団に潜りこみ、苦しく息を荒げながら涙を流して、母の名を呼んだ。もうその頃は東北本線が雀宮駅にとっくに着いて、実家に帰っているであろう家族を想い、私は涙と鼻水で顔中をぐちゃぐちゃにした。太陽の匂いと母の温もりが、一人きりのワンルームには優し過ぎた。

きっかけを失って

翌日、朝起きたらまぶたが腫れぼったく重くのしかかっていた。何も食べる気がしなかったけど、「朝は少しでいいからお腹に入れなさい」という母の言葉を忠実に守って、パンを一切れだけオーブンで焼いて食べた。

網島駅前で購入してくれたのは母だった。カウンターの内側に立ってにこにこ笑っている、自分よりも少し年上の女性、おそらく店主の妻と思える店員を見つめ、

「このパン屋さんは、きつとおいしいわよ」

と私に小声で伝えた。店主の妻はショートカットに眼鏡の人なつつこい笑顔で、私に一斤の食パンを勧めた。母は、

「娘が、大学に入って今日から一人暮らしするんです」

と言った。店主の妻は、

「まあ。私の長女も今年大学に入りましたよ」

と答えた。

母は誰とでもすぐに仲良くなれるタイプで、無口な父に似てしまった私は母の気さくな性格が本当にうらやましかった。母と店主の妻はずっと昔から友達同士であったかのように話しこんで、私は父と遠巻きにそれを見ていることしかできなかった。

母が「きつとおいしいわよ」と断言したパンは柔らかくて、強いバターの香りが鼻を襲った。トースターで焼いて軽くバターを塗ってパンを噛んでいるとまた両の瞳から涙がこぼれてきた。折角時間をかけて腫れた目を化粧でごまかしたのも無駄になってしまった。「お母さん」指についたバターを、気付くと幼い子供のように舐めていた。

入学式の次の日は、授業の選択科目を決めた。それは自宅でもいいことだったけど、どうせ一駅だけだからと大学に行き、何となくふらふらとベンチを転々としながら語学や、選択可能な授業を選んだ。周りにも同じような、一目で新入生と分かる人たちが一杯いて、遠慮がちな眼差しの投げ合いでお互いを確かめ合ったけど、結局私は誰にも声をかけられなかった。

「すみません。新入生の方ですか？」

ずっとその声を待っていたから、腫れぼったいまぶたを目立たせないように、えくぼを強調させて声の方向に振り向いた。

「はい」

そう答えて彼を見ると、私より二歳くらい上で、背の高い男子学生が立っていた。三年間の女子高生活で私は、男性への耐性を随分衰えさせていた。だから勧誘のために声をかけられただけなのに、彼の目をちゃんと見られないほど気が動転してしまった。

「もうサークル、決めました？」

「い、いえ」

「僕たちはこじんまりとした集まりなんですけど、良かったら見学していきませんか？」

「え？ あ、はい……」

彼の大きな背中の後ろについて、今日何度も行き来した大学の敷地内を歩いた。彼が振り向いて話す度に、吐息が私の前髪を弱く揺らすのが、恥ずかしいくらい心地良かった。彼や、彼と同じように爽やかな若者たちとテニスをしたり、海水浴をしたり、ハイキングをしたりして過ごす日々を想像した。高校生の時に読んだ進学情報誌の、「華のキャンパスライフ」と銘打たれた特集記事そのままに、私はこれからの四年間に対してあれこれと想いを巡らせていた。

「どうぞ。ここが部室です」

色々なサークルの部室が寄せ集められた建物の、二階奥の部屋に通されて、私は一瞬で空想の世界から冷たく突き放された。油で揚げた菓子類、汗、煙草がごちゃ混ぜになった臭いが、こもった部

屋の空気に充満していた。それよりも衝撃的だったのは、部室にたむろする美男とは言い難い男たちが、私に対して投げつけてきた目線の質だった。百グラムとか二百グラムとかできっちり分けられ、定額で売られている肉の、同じようなパックを品定めする、そんな目線だった。特に部室の一番奥、窓際に座る男の、眼鏡の奥でまっすぐに私の方を向いている一重の細い目線に、もうどうしようもなく耐えられなくなった。

「すみません。この後用事があるので、帰ります」

「え。見学していきなよ」

「すみません。また今度にします」

勧誘してくれた背の高い彼が引き止めてくれたけど、私は強引にそこを後にした。去り際、眼鏡の男は全く同じ細い目のままで、部屋の空気はこもった不潔さのままで、吐き気がした。部室の壁に貼ってある、「漫画研究会」と書かれた文字と美少女のイラストを、破り捨てたい衝動に駆られた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0490ba/>

カワサキの一一〇〇

2012年1月9日19時46分発行